原始謾筆風土年表について

古 田 良 一

青森県下北郡大畑町の村林源助氏の家にある「原始謾筆風土年表」という写本は、52巻の中で、巻1と巻4が早くなくなって、今は50巻だけであるが、誠に興味深いものである。村林家二代目の祖で、通称を源助といった人の著作である。源助は名を時明、号を鬼工といい、父の福救は近江国神崎郡川南村の人である。川南村は最近の町村合併前には八幡村川南といった処で、今は、恐らく能登川町に入っているであろう。神崎郡と愛知郡との境を流れる愛知川の南岸にあり、琵琶湖岸にも近い農村である。福救は15歳の時、享保17年(1732)2月に、ある近江人に伴われて青森に来て一旦そこに落着き、ついで大畑に来たと伝えられる。とにかく日本海の手運による近江人の北方発展の一つのあらわれと見るべきである。

福救は恐らく材木商の家に働いたのであろうが終に大畑に永住することになり、その地の小笠原氏を娶り、安永9年(1780)63歳で死んだ。その子時明が即ち著者であって、寛延元年(1747)に生れ、文政4年(1821)74歳で死んだ。妻は池田氏である。福救の家業が何であったかは明らかでないが、時明がこの書の中に呉服物の仕入先を書いていることから考えると、呉服物の販売をやっていたのかと察せられる。相当裕福な家に生れた時明は、何不自由なく育ったが、青年期になるまでに、寺子屋ばかりでなく、漢学の塾にも通って、かなりの教養を身につけた。32歳で町の宿老を拝命し、57歳で退役するまで、25年間に亘って宿老または検断をつとめた。これは家が富有であったことにもよるであろうが、学問もあって人物がすぐれていたのが主なる理由であろう。

時明は若い頃から見聞したことを書き留め、また読んだ書物の中から抄録したものが多かったので、これを整理して一大著述をする計画を立て、名を「原始謾筆風土年表」とした。風土の文字は中国に淵源があり、自然と人文の相関を意味する。この書も大畑を中心とする下北郡一帯の自然と人文を知らせる目的で著わされたと思う。原始の文字は易に出典があり、事物の

起源を究めることを意味する。この書に史実の起源を説いているところが多いのは即ちそれである。編年体で歴史書の体裁をとっているところに特色がある。52巻の中、33巻までが正編で、34巻以下は続編である。巻1がないので、最初がいつから始まるかわからぬが、巻2は寛永5年(1628)から始まり、最後の巻52は文政元年(1818)で終わっている。すなわちこの間の年々の出来事を書いたものであるが、自分が見聞したことの記事は、ある程度の年齢に達した後のことであって、幼少の頃のことはおぼろげの記憶であり、ましてそれより前のことは色々の書物からの抜萃である。30歳前後から一部分づつは書いていたようであるが、本格的にやり出したのは、宿老を退いた文化元年頃からである。記事の内容は著者の生きていた時代よりも前のことはあまり史料の価値はないが、著者の見聞にかかることは興味も多く、また参考にもなる。もとより下北郡を主とすることが多いが、必ずしもそうばかりでなく、近世末期の史料として役立つこともある。また全体を通じて著者の学問や教養を知ると共に、大畑付近の文化をうかがうことができる。

今ここに巻11と12に収められている著者の上方への旅行記について述べよう。これは当時の交通地理に多少とも関係があるからである。

安永元年(1772)著者が25歳の時に上方に旅行をした。これは恐らく見聞を広めさせるために、江州にある祖先の墓に参詣させるために、父がやらせたものだと思う。正月20日の早朝三人づれで大畑を出発、途中で同行者が加わり、野辺地からは七人づれとなった。七戸・三戸・盛岡を通して仙台領に入り、平泉・松島・塩釜・多賀城の名所旧蹟を見、仙台の繁盛に驚き、南下して信夫郡では文字摺石や安達原を見、下野国に入って日光東照宮に詣でた。それから今市を通して鬼怒川の岸に出て、舩で急流に浮んだとあるから、これからは水路をとったのである。即ち利根川に出て、それを溯り、境で舟を乗りかえて江戸川に入り、行徳で小舟に

乗って江戸鉄砲州本湊町栖原久次郎の店に著いた。こういう河による交通がこの頃にはかなり用いられていたであろう。江戸滞在中に大火に出会った。この火事は明暦の振袖火事以来の大火といわれるが、この書には3月3日の桃の節句の後に記してある。しかし徳川実紀によれば、この火事のあったのは、2月29日であるから、著者はこの書を著わす時に、誤ってここに入れたものだろう。この大火を著者は見ているから、著者の江戸に著いたのは2月の末であったと思う。そして3月5日に焼跡を見物し、6日にはいよいよ伊勢に向けて西上した。同行者の中で二人が江戸に残ったので、これからは五人づれとなった。

東海道を西に向い、富士川の川止めに会って問道を廻り、恐ろしい思いをして夜半に由比に辿りついたことが書かれ、また大井川でも川止めに会い、富士川でこりたから、滞在することにしたが、川を渡る時に中瀬で旅人が渡人足にねだられて、口ぎたなく罵られているのが嫌であったと書いてある。川渡しのための交通不便の様がうかがわれる。天竜川については記事がないから、ここはそれ程に難儀ではなかったであろう。しかし浜名湖の入口である今切渡では千尋の底に肝を冷したとある。三河を過ぎて尾張に入り、熱田から借切りの船を雇って桑名に著き、それより南に向い、山田に至って御師三日市太夫の家に泊った。三日市太夫は奥州一円に関係の深かった御師であるが、その家が立派で、浴室のきれいであったことに驚いている。また魚が豊富で食事のよかったことも書いてある。外宮・内宮に参拝、二見浦・朝熊嶽・志摩の磯辺を見物した。それから伊賀国を過ぎ、笠置を経て奈良に至り、春日神社に参拝したことを、「孝行の礼、遠き嚮祖の階下に頼つき」と記している。これは著者の家は西園寺家から出たと伝えられ、藤原氏の子孫であると考えていたからである。諸大寺を参拝、法隆寺まで行き、それから長谷寺を経て吉野に至り、紀州に入って高野山に登り、遍照光院に宿を取ったが、坊の丁重なことはこの上なく、伊勢とは違って金を取るまいと努めているようだとほめている。橋本から紀伊見峠を越えて河内路に入り、千早・赤坂の戦蹟を見、叡福寺に上宮太子を偲び、堺に行って木綿問屋の倉庫に入り、綿

類の豊富に驚いているが、これは著者の家業と関係があると思う。それから住吉、天下茶屋を経て天王寺に至り、大坂に著いた。

大坂では芝居や操りを見物し、それから同行の四人は播州・讃州の見物に旅立ち、著者は父の出身地江州川南村に行き、京都で落ち合う約束をして一人で出発、男山八幡宮を拝し、天王山を見て天正の昔を偲び、伏見から京都に入った。宿所は麴屋町三条上ル松屋清左衛門である。この家は呉服物の仕入先であったらしい。それから江州に向い、安土城・観音寺城の旧址を見、能登川から川南村に著いた。父の生れた源右衛門家に行つて祖先の位牌を拝し、菩提寺である小川村の弘誓寺に行き、墓に詣でた。それから親戚の人たちと話をしているが、近江人の第一印象として、風俗言語がととのっていると書いてある。また大畑在住の近江出身者の伝言を伝えるために処々を訪問し、奥州の形勢を話し、氏神の祭礼を見物、多賀神社にも参詣した。そして彦根に出て、姉川や賤が嶽の古蹟を探り、湖上を矢走に著き、京都の宿所に帰った。折よくその前日に播州帰りの四人が来たところだから、その翌日から一同で京都の市内見物をした。同行者の中で二人は祇園祭や加茂川の夕涼みを見たいというので、三人だけが帰路につくこととなった。北陸道を取ろうかとも考えたが、東山道の古戦場や木曾の棧、多胡の碑などを見るがよからうということになり、江州路では醒井での日本武尊の艱難を思い、美濃に入つては関が原の古戦場に昔を偲び、信濃では木曾の棧道のようなすが委しく記され、善光寺に詣で、姨捨山、川中島古戦場を見、碓氷峠を越えて上野国に入り、多胡の碑を見、高崎の町では織物の本場だけに、呉服店の騒がしいこと一通りでないとある。それからの道中で長州侯の行列に出会った時に、馬方が江戸風の言葉で「お前方は」と問うたので、都のふりはこの時とばかり「京の田舎の片ほ」と歌ってやると、成程と真に受けたと、書いてあるが、これは歌沢の「わしが在所は京の田舎の片ほ」との起原になった端唄があつて、それを歌ったのであろうが、著者がなかなかの粹人であったことを思わしめる。こうして板橋口から江戸に入り、2・3日滞在してから出発、奥州街道を北に向つて、5月に郷里に帰った。

以上が旅行記の大要であるが、これは当時の
交通や各地の風物を知る上に面白い資料となる

An Itinerary in the 18th Century

Ryôichi FURUTA

The contents of fifty volumes of the memoir, "Genshi-mampitsufuudo nenpyo", written by Gensuke Murabayashi in Oobatake, Aomori Prefecture, are very interesting for the studies of historical geography. The writer's itinerary from Oobatake to Kyoto is a detailed record of traffic conditions in Eastern Japan in the 18th Century.